

講義名	異文化間コミュニケーション論			授業形態	
担当教員	中川 典子	開講期・曜日・時限	後期 水曜日 2時限		
		単位数	2	履修開始年次	1年生

主題と概要

異文化間コミュニケーションは、1960年代初頭のアメリカ合衆国に始まった分野である。地球規模で文化の多様性が重要視され、多種多様な文化と接触する機会が増える現代において必須の学問的、かつ、実践的分野である。本コースの目的は、異文化間コミュニケーションの基本概念を学び、様々な演習活動を実施することで、異文化の背景と価値観、考え方をもつ人々との共存を可能とする持続的な異文化間コミュニケーション能力を養うことである。このクラスでは異文化間コミュニケーションの基礎理論に関する講義と演習活動の二つのアプローチを用いた授業を実施する。このコースは本学の「グローバル科目」のディプロマポリシーに掲げられた「グローバルな視点から、海外の社会や文化について学ぶ」という目標を、異文化間コミュニケーションの理論と実践を通じて達成することを主眼としている。

到達目標

- 本コースでは以下の能力を養うことを目標とする。
- (1)自己分析力を養い、自文化に対する客観的視野を養える。
 - (2)同一文化圏内に存在する多様性も含め、文化的多様性を尊重する態度を養える。
 - (3)他者の意見を傾聴し、尊重することの重要性を学び、他者を理解するための態度を養える。
 - (4)入替で堂々と自分の意見を述べようとなる。
 - (5)グローバルな視点で物事を考える力を養える。
 - (6)上記を踏まえ、本学の「グローバル科目」のディプロマポリシーに掲げられた「グローバルな視点から、海外の社会や文化について学ぶ」という到達目標を達成する。

提出課題

授業後に「学びと気づきの振り返りシート」を執筆し、期限までに提出する。翌週の授業の準備としてその他の課題を提出する。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法

受講生が執筆した「学びと気づきの振り返りシート」の幾つかを匿名で教員が紹介し、コメントする。その他の課題がある場合は、提出された内容を統括し、スライドで提示しながら解説する。

評価の基準

- (1) 課題（振り返りシート、その他）（60％）
 - (2) 定期レポート試験（40％）
- * 上記の両方に取り組みなければ、単位は取得できません。

履修にあたっての注意・助言他

- (1) コースの評価は、上記の成績評価基準のすべての項目を総合して行うが、一つでも不参加の項目がある場合は不合格となる。
- (2) 講師が入室したときに教室にいない場合は遅刻者と見なす。特別な理由がない限り遅刻厳禁。
- (3) 特別な理由のない15分以上の遅刻は欠席となる。また、5回以上の欠席の場合は定期試験の受験資格を失い、単位を取得することはできない。

教科書

.使用しない。				
---------	--	--	--	--

参考図書

.異文化トレーニング、	八代京子、ほか	三修社	3,190	9784384012439
.異文化コミュニケーション-新・国際人への条件、	石井敬、ほか	有斐閣	3,200	9784641182554
.異文化コミュニケーション・キーワード、	古田暁、ほか	有斐閣双書	1,980	4641058741

その他

ハンドアウトおよびその他の資料は、授業中に配布し、適宜、「講義連絡」にも提示する。

授業計画

- 回 授業計画
- 1 コースガイダンス：履修に際しての重要事項の説明とミニ講義（異文化間コミュニケーション発展の経緯）
 - 2 コミュニケーションとは（1）：コミュニケーションとは、コミュニケーションレベルに基づいた類型、対人コミュニケーション過程の要素
 - 3 コミュニケーションとは（2）：コミュニケーション理論とモデルにおける4つの機能、4つのコミュニケーションのモデルの紹介
 - 4 コミュニケーションとは（3）：文脈調査に基づくコミュニケーションの定義
 - 5 コミュニケーションとは（4）：コミュニケーションの5大基本前提、アクティブ・リスニング
 - 6 文化とは（1）：同じ空間 vs. 離れた時間、文化とは、「レインボーカラー」から文化の特徴を探る
 - 7 文化とは（2）：第3文化の子供たち（Third Culture Kids）、文化の定義、文化における3つの切り口
 - 8 文化とは（3）：「あなたの所属文化」、社会階層と格差、在留外国人統計、日本における外国人問題①（技能実習生問題）
 - 9 文化とは（4）：日本における外国人問題②（看護師・介護士問題、不況児童の問題）
 - 10 文化とは（5）：浜松国際交流センター（HICE）の活動、外国人問題に関して乗り越えなければならない課題、文化の基本前提
 - 11 知覚とカテゴリー化：知覚とは、カクテルパーティー効果、焦点象（図）と背景象（地）、サブアウェアの形成方法
 - 12 カテゴリー化とステレオタイプ：カテゴリー化とは、ステレオタイプとは、ステレオタイプ定義、ステレオタイプの対象、ステレオタイプの形成方法
 - 13 マスメディアとステレオタイプ1：ケルシーの実験、ビデオエクササイズ（ガンホー）
 14. マスメディアとステレオタイプ2：ビデオエクササイズ「ガンホー」（フィードバック）、ステレオタイプの種類、ステレオタイプの特徴、II. マイクロ・アグレッション：マイクロ・アグレッションとは、マイクロ・アグレッションの事例、マイクロ・アグレッションの問題点
 15. I. マイクロ・アグレッション：前回の課題（マイクロ・アグレッション）のフィードバック、II. 偏見と差別の消滅に望まれる態度：エンパシーとシンパシー

* 授業の進捗状況により、内容を調整する場合があります。

授業形態（アクティブ・ラーニング）

<input type="radio"/> A：PBL（課題解決型学習）	<input type="radio"/> E：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
<input type="radio"/> O：ディスカッション、ディベート	<input type="radio"/> E：グループワーク
<input type="radio"/> O：プレゼンテーション	<input type="radio"/> K：実習、フィールドワーク
<input type="checkbox"/> K：その他（A・L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）	

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- 予習：前回の授業の復習、および、その週の課題に取り組む。（約2時間）
 復習：その日の授業内容を復習し、理解を深めるとともに、講義内容や授業内活動に対する振り返りシートを執筆する（約2時間）

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

異文化間コミュニケーションの理論を現代のグローバル社会で起きている問題に応用し、考察することにより、知識を知恵に転換することができる論理的思考力を身に付け、多様な視点の獲得により新しい価値を生み出す創造力を醸成する。また、国内外の人たちと活潑なコミュニケーションをとることができる素養を身につけることにより、卒業時に身につけておくべき専門・能力の育成につながる。これらの能力は専攻学生に求められる変わりゆく経営環境の動きに強い関心を持ち、企業組織の中でリーダーシップをとって具体的な改善や解決の提案ができるための基礎知識の獲得、経済学部生に求められる人間、社会、自然に関するこれまでの学問的成果の基礎を身に付け、現代社会の諸問題を幅広い観点から考察し、課題を提案することができる力の育成。そして、人間社会学部生に求められる現実社会の様々なテーマに取り組み、よりよい人間社会を創造することができる学生を育てるという理念の達成に役立つ。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

提出された前回の授業に関する「振り返りシート」の幾つかを教員が紹介し、コメントする。授業内容、その他に関する質問は随時、振り返りシートを通じて受け付け、授業中に回答する。

実務経験の有無及び活用

備考

このコースは一方向的講義のクラスではないため、真摯、かつ、積極的に授業内活動に参加をしてください。第1回目の授業で履修に関する重要な説明をしますので、必ず出席すること。授業に関する連絡は「講義連絡」を通じて行うので必ず確認してください。